

二〇一三年二月二十七日(昆陽池参加者一五名)

歌碑巡る昆陽の池塘や百千鳥
木隠れに池の明るさ風光る
瓢の笛ひと吹き鳴らし句座和む
苑うららたちまち鳩に囲まるる
次々と鴨着水の水しぶき
昆陽池の鴨百態を見て飽かず
葦叢の池畔にあまた恋の鴨
芽木の間を広ぐる空のありにけり
靴跡の向きばらばらや春の泥
鳥帰る彼の地平和であるように
鳥曇ドームの屋根は総ガラス
紅さしてふくらむものの芽のありぬ
春雨に片袖ぬるる西行碑
春うらら気根轟めく汀かな
鵝の群れの中州を占むる昆陽の池
逍遥すふるさと小径春落葉
すみれ野と呼びたきほどや館の前
小流の水際を埋む名草の芽

うつぎ
"
"
"
"
ひかり
"
"
"
"
よし子
"
"
"
"
菜々
"
"
"
わかば
"

春泥に足をとられつ歌碑の径
鴨引いて風の細波あるばかり
大池に一尾の鴨も見あたらず
笹子鳴く径句碑歌碑をつづりけり
園児らの黄色き声や草萌ゆる
句碑歌碑を訪ねゆく径初音聴く
白鳥の首の自在に毛繕ひ
春雨のぬれて読めざる恋の歌碑
そぞろ歩のふるさと小径下萌ゆる
せせらぎに座る盤石名草の芽
レストラン大玻璃ごしに木々芽組む
陸の鴨機嫌の腰を振りにけり
春泥に足なとられそ探鳥す
踏青や不即不離なる老夫婦

"
小袖
"
"
"
"
"
満天
"
"
有香
つくし
英一
ともえ
かかし
きづな

吟行句会みの選

二〇一三年二月二十七日(昆陽池参加者一五名)